セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
アニュアルレポート 2009

Save the Children JAPAN

社団法人　セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（ＳＣＪ）

1986年設立。世界と日本で子ども支援を行っています。1995年に社団法人の認可を受け、2001年に特定公益増進法人として外務省より認定。
ネパール、ベトナム、ミャンマー、モンゴルの事業地では日本人スタッフを駐在させ、教育、栄養・保健、子ども保護などの分野で支援事業を展開。
ヨルダン、スリランカなどの事業地でも日本人スタッフを派遣し、紛争または自然災害などの緊急事業を行っています。また、カンボジア、コートジボワール、ニカラグアの事業地では他国のセーブ・ザ・チルドレンと協働し活動をしています。

セーブ・ザ・チルドレン（ＳＣ）

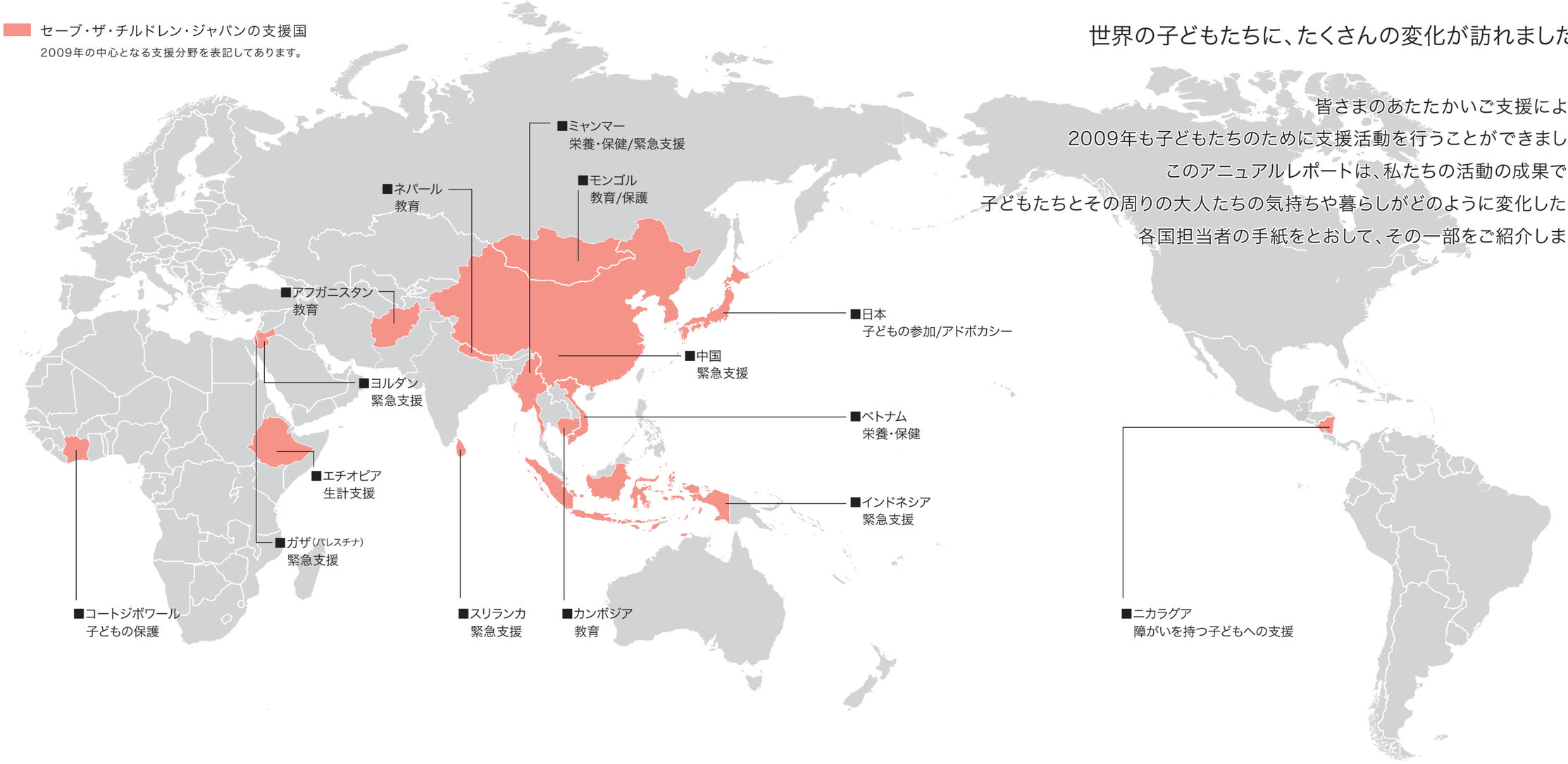
1919年創設。90年以上にわたり、すべての子どもの、生きる、育つ、守られる、参加する「子どもの権利」の実現を目指し、さまざまな支援活動を展開。
1989年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」の作成にも携わりました。子ども支援の世界的リーダーとして、国連や各国政府からも重要性を認められ、国連経済社会理事会（UN ECOSOC）のNGO最高資格である総合諮問資格（General Consulative Status）を取得。日本を含め、世界29ヶ国にある独立したセーブ・ザ・チルドレンがパートナーシップを結び、他のNGO団体と連動し、現在、約120の国と地域で活動中です。

社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F　www.savechildren.or.jp

この冊子は、株式会社ラピトのご協力により印刷・製作しています

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの支援国

2009年の中心となる支援分野を表記してあります。



世界の子どもたちに、たくさんの変化が訪れました。

皆さまのあたたかいご支援により、
2009年も子どもたちのために支援活動を行うことができました。
このアニュアルレポートは、私たちの活動の成果です。
子どもたちとその周りの大人たちの気持ちや暮らしがどのように変化したか。
各国担当者の手紙をとおして、その一部をご紹介します。

ネパール

「早く教室を見て！」と私の腕を引っ張る女の子。その嬉しそうな表情は今でも忘れられません。それは、ネパール西部スルケット郡のとある学校を訪れた時のこと。その子に連れられて教室の中をのぞくと、様々な教材で溢れ、教師は真剣に授業に取り組み、子どもたちはとっても楽しそう。私は驚きと喜びで胸がいっぱいになりました。実はその学校、数ケ月前まで、教室は荒れ放題、教材はほとんどなく、教師は酔っぱらいながら授業を行うというひどい状態でした。周りの大人たちと話してみても、貧しさを理由に、あきらめてしまっている様子。そこから先はまさに戦いでした。まずは「学校改善はコミュニティ全体の問題」という意識をもってもらうため、教師や保護者、地域住民と何度も話し合いを重ねました。そして、徐々に賛同者を増やしながら、彼ら自身が知恵を出し合い、教材を手作りし、みんなで学校改善に取り組んできました。大人たちの変化は、子どもたちにも影響を与えたようです。私を教室に案内してくれた女の子は、将来の夢を話してくれました。「子どもがもっと良い教育を受けられる環境づくりに携わりたいの」こういう子が育つなら、この学校はこれから先もきっと安心。活動の成果を感じた瞬間でした。



子どもたちも学校運営に積極的



鈴村彩乃

2009年のネパール

公立小学校の教育の質の改善を実施中

ネパールでは貧困や紛争、社会差別などで、未だに初等教育を受けられない子どもたちがたくさんいます。教育の機会提供だけでなく、教育の「質」を地域全体で改善することなしには、全ての子どもたちが教育を受けることはできません。2009年、東部マホタリ郡とダヌシャ郡では、子どもを含む約84,000人を対象に、コミュニティ自身による学校運営のモニタリングなど、自立発展を目指して事業を行いました。具体的には、



整備された教室で学習できるようになりました。

あらゆる社会層を含む学校運営委員会を140の学校で組織し、地域住民や子どもたちが学校改善計画を立てそれを実施。結果、教育環境が改善され、子どもたちの出席率が向上しました。さらに、子どもが教育を受ける権利や子ども保護の重要性の理解を促進するため地域住民組織が中心となり学校入学キャンペーンや研修を行った結果、3,422人の入学が実現しました。そして現地行政、NGO、メディア、住民組織などに41の集会を開き相互協力を求めることで、2010年は、子どもの権利に関する研修や教育状況の調査を行い、政策提言を行っています。



こちらは女子の識字教室。

Rewrite the Future 武力紛争の影響下にある子どものための教育

西部のダン郡、スルケット郡においても引き続き、SCのグローバル・キャンペーンの一環として、武力紛争の影響を受けた子ども、特に女子、低位カースト、先住民族、紛争未亡人の子どもを中心に、彼らが質の高い教育を受けられるよう活動を行いました。ダン郡で20校、スルケット郡で10校の学校を支援し、35の幼児開発教育センター、17の公立学校への編入準備コースなどを開設した結果、計853人の子どもたちが教育の機会を得ることができました。　また地域住民と実施した学校入学キャンペーンで新たに1,317人が公立学校に入学できました。また、紛争未亡人の子どもに対する差別を解消するために、当事者である子ども610人による子ども会を組織。保護者や教師111人を対象に子どもの権利に関する研修も実施した結果、紛争未亡人や子どもを取り巻く課題についての地域住民の理解が深まりました。他、学習環境や学校運営の改善を行った結果、初等教育の純就学率はダン郡では前年の88%から91.4%に、スルケット郡は93.2%から96.4%に上昇しました。



現地の子どもたちと鈴村スタッフ

（「SC」は、セーブ・ザ・チルドレンの略です。「SCJ」は、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの略です。）

ベトナム

ご支援をいつもありがとうございます。特に昨年は母乳育児の支援事業にたくさんのご賛同をいただき、嬉しく思っています。実は昨年9月末、支援地のクアンチ省に台風ケッサーナが上陸しました。被災地へ行ってみると、農地は雨で流され、家や幼稚園は柱を残すだけ。食べ物も流されて子どもたちはお腹を空かせていました。ベトナムも台風が毎年上陸しますが、年々その規模が大きくなっています。そういった自然災害や自然環境の激変で一番苦しんでいるのが貧しい家庭の女性や子どもたち。栄養研修に参加するトゥイさんがこんなことを言っていました「森が減ってきていて、前は往復2時間かかった薪拾いが今は倍の4時間もかかっているんです。夫は出稼ぎで家を留守にしているから、家のことは私が全部やっています。大変だけれど、娘2人のために頑張ります」家庭菜園で栄養のある野菜を育てたり、下の子を母乳で育てたり、トゥイさんが出来ることを精一杯、実践していることを知って、私は彼女からエネルギーをもらいました。私が、ベトナムで今日生まれた子ども、さらにその子どもたちが幸せに生きられるようにやらなければならないこと。それをしっかり考えながら支援を続けていきたいと考えています。



トゥイさんと愛娘



越川芳枝

2009年のベトナム

「総合的子どもの発達事業」子どもの栄養改善を目指し引き続き実施

ベトナムでは、5歳未満の子どもの29%が慢性的、7%が急性の栄養不良と言われています。その多くは、母親の育児習慣や食習慣、栄養知識の不足などに原因があります。SCJは、妊産婦を含む母親が栄養研修や家庭菜園の実践などを通じて、地域の安価で栄養価の高い食材や、その調理法を知り、育児習慣を正しく理解し、子どもの栄養改善を持続的にできる仕組みづくりを、地元の保健士やボランティア、行政の職員とともに行っています。支援地はイエンバイ省。妊産婦を含む母親を通じて、子ども約5,000人の健康と栄養改善に取り組みます。

母乳で赤ちゃんを守る『OPPAI PROJECT』開始

子どもの栄養改善のための一事業として、2009年7月より、クアンチ省の主に少数民族の妊婦と母親約2,000人を対象に、母乳育児の大切さを伝え、生後6ヶ月までの完全母乳育児を広める『OPPAI PROJECT』を、2010年にかけて実施しています。女優の藤原紀香さんもサポーターの一人。昨年8月に現地の活動を一緒に視察しました。



産後まもない女性にインタビューする藤原さん

子どもの参加をとおした環境教育

イエンバイ省の中学校12校、約3,000人の生徒が、課外授業の一部で、自分たちの住む地域の環境について学び合い、学校や地域の環境を自主的に改善する活動を行っています。水や衛生、HIV/エイズ、食の安全、ケガ予防など、健康的な生活のスキルを身につけています。



地域の環境について調べたことを他の子どもたちに発表

台風ケッサーナ被災した子どもたちへ緊急支援

2009年9月29日、ベトナムを直撃した台風ケッサーナの被災者に対して、SC全体で大規模な配給を行いました。支援地域はクアンチ省、フエ省など日ごろSCが支援を行っている地域。15,400世帯(76,293人分)に米、水用タンク、毛布、調理器具、蚊帳などの生活必需品、衛生用品などを配布。特に5歳未満の子どもや妊婦たちが急性の栄養不良にならないように配慮しました。



配給を受ける女の子

この他、現在実施中の活動として、2009年9月から、カマウ省とカントー省の貧困層の女性500人を対象に小規模貸付を実施。女性の所得の向上と自立を助けることで、子どもたちの生活が安定し、学校や病院へ通えることを目標に支援を実施しています。また、「キズケア」教育プロジェクトも実施中。毎年7,000人の子どもがケガや傷害で発育に問題を抱えていることから、子どものケガを未然に防ぐための環境づくりキャンペーンを行っています。

ミャンマー

皆様はじめまして。2009年8月にミャンマーの駐在員となりました藤野と申します。昨年私たちが力を入れた活動に、子どもたちの下痢などの感染症を防ぐための水と衛生の事業があります。飲料水やトイレなどの水道設備が普及していないため、それらの設置・整備が必要なのです。ただし、設備が整っても、使う文化や習慣がないと浸透していかないのが実状です。本当に苦労している点ではありますが、解決の糸口を思わぬところで見つけました。小学校です。今まで何度か小学校にトイレと手洗い場を設置したことがありますが、必ずといっていいほど、最初は誰もトイレの後に手を洗いません。そこで、「トイレの後は！」という歌や、「石鹸で手を洗おう！」というダンスを教えてあげる訳です。歌詞とフリを覚えさせてしまえば、僕ら大人はジャマもの。みんな最高の笑顔で、トイレの後でもないのに歌って踊って手を洗ってますから。僕らが「いいことをやっている」と思っていても、子どもたちがメリットを感じていなければ、ただの押しつけになってしまうということです。国や年齢が違っても、相手の目線に立ち、創意工夫をこらせば伝わるということを、身をもって学びました。



藤野康之

2009年のミャンマー

サイクロン・ナルギス親への生計支援

2008年5月に発生したサイクロンの被災者に対して、2009年も親への生計支援を継続して行いました。今回中心となったのは、ボートや漁業道具を流され、生活の手段を失ったエヤワディ管区の漁民3,537世帯。2,376隻のボートと特に農地を持たない住民を対象に2,250式の小型魚網を配布。親や保護者の食糧と収入源を確保し、子どもが安心して暮らし学校にも通えるようにしました。ボートの配布と同時にメンテナンスのための工具と工具の使い方の研修を実施し、基本的な家計管理についても研修を行って、子どもの教育や病気など、いざという時のための貯蓄を奨励しました。その後の視察で、ボートは子どもたちの通学用にも役立っており、出席率が上がったという現地からの報告を受けました。



ボート贈呈式の日の様子

サイクロン被災者に対する水と衛生の支援

サイクロン・ナルギスで被災した地域への支援として、安全な飲み水の確保、トイレの設置、衛生推進教育なども行いました。対象は、ヤンゴンとエヤワディ管区の47,500人。サイクロンの直後、現地の住民が利用する貯水池の半分が壊れ、人口の60％近くが安全な飲み水を得ることができない状況でした。SCJはUNICEFとの協働で、現地の長期的な復興のために、２８の貯水池を修復、２つを新しく建設。２７の小学校に衛生的なトイレと給水所、手洗い場の設置を行いました。約5,000人の生徒が衛生推進教育を受け、下痢に罹る子どもが減り、水汲みの必要がなくなって勉強や遊び時間が増え、特に、トイレがなくて学校へ通いづらかった女の子たちに喜ばれています。また学校に限らず、地域に対して、衛生に関する啓発活動を行い、水のろ過器などを配布しました。



石鹸で丁寧に手を洗う女の子



設置されたトイレと手洗い場

子どもの健康と栄養事業

ミャンマーは、10人に1人が5歳の誕生日を迎えることができずに亡くなっており(※)、主な原因の1つに栄養不良が挙げられます。カレン州のパアンの30村で、子どもの健康と栄養状態の改善のために支援を実施。定期的な身体測定、栄養給食ワークショップ、ハエ防止型のトイレ設置、医療施設の修繕、母子健康手帳の利用研修、野菜栽培や養鶏の研修を行いました。

(※)The State of World's Children 2010

モンゴル

皆様、モンゴルに対していつもご支援ありがとうございます。
ご存知の方も多いかと思いますが、モンゴルでも親から子どもへの暴力、特に子どもへの体罰や言葉による暴力が後を絶ちません。子どもたちの愛らしい表情を見ていると、思わず目を細めてしまうのですが、子育ては楽しいことばかりではありません。私も3人の幼い子どもをもつ親として、子育てで迷うことは何度もあります。でも、私たちが保護者を対象に実施している「ポジティブ・ディシプリン」の研修で、参加者の意識はかなり変化しています。あるお母さんからは「自宅でストーブを消さないで外出した子どもを見て、思わず手が出かかったのですが、研修での学びを思い出して怒りをこらえ、ストーブを消さないで外出すると火事を引き起こす危険があることを、分かってもらえるまで説明しようと思いました」というコメントをもらいました。また、思春期の娘をもった別のお母さんは、それまで娘と口喧嘩が耐えなかったそうですが、研修後は娘の話に耳を傾け、彼女の価値観を理解しようと努めるようになったそうです。私自身も、「ポジティブ・ディシプリン」がきっかけで、子育てやしつけに対する意識が大きく変わりました。子育ては、それなりの訓練やアドバイスが必要なんだとつくづく感じています。



豊田光明

2009年のモンゴル

子どもの権利の実現を目指して暴力のない公平な教育環境づくり

モンゴルでは、2006年から、公教育現場における生徒に対する体罰などを禁止する「改正教育法」が施行されているにも関わらず、未だに、生徒に対する教員の体罰や不正な金銭の徴収、差別といった問題がなくなりません。SCJは、これらの問題がいち早くなくなり、生徒が教員と健全な信頼関係の下で教育を受けられるよう、2009年は、教員や学校関係者への各種研修を中心に実施しました。対象は、首都ウランバートルとモンゴル最東部のドルノド県の26の学校。21,529人の生徒、585人の教員・学校関係者、330人の保護者に関わる活動です。具体的には、国家監査局教育監査課の監査チームと共同で、改正教育法の基本理念とその内容、体罰、叱咤罵声の処罰と不正の概念について教員たちへ研修を実施。また、SCが推進する暴力にたよらない子育て法「ポジティブ・ディシプリン」も、モンゴル国立教育大学と協力して導入、指導法を対象校の教員たちに伝えました。また公平な環境教育づくりのために、モンゴルでは未発達な保護者会と生徒会の組織づくりを推進し、子どもも含めて、学校運営に積極的に参加し意見の言える体制を整えています。この事業は2010年も引き続き実施されています。



ポジティブ・ディシプリンを学ぶ教員たち



生徒会の子どもたち

子どもの保護事業

子どもたちが虐待といった家庭内暴力や育児放棄の危険から適切に保護されること、またモンゴル政府が、子どもの発達や生命に直接関わるこの深刻な社会の課題に取り組み、子どもを保護する体制が確立されることを目指して、SCJはウランバートルとドルノド県で子どもの保護活動を展開しています。2009年は、リスクを抱えるのべ5,000人の子どもを対象に保護センターを運営し、心理ケアや生活支援、生活指導を実施。またSCJだけでなく地域ぐるみで子どもが暴力から守られるよう、子どもを守る地域ネットワークを組織、運営しました。一方、モンゴル政府に対して、家族法の改正草案を提出。子どもに対する体罰の全面禁止を目指してアドボカシーを実施しています。この支援事業の中でも500人以上の保護者に対して「ポジティブ・ディシプリン」の研修を行ったところ、子どもとの関係を良くしようと努力する参加者の声を多数聞くことが出来ました。



地域のネットワークが子どもたちを守ります。

アフガニスタン

ここアフガニスタンの山岳地バーミヤン州の村で、私たちは子どもたちを集めて週2日保健教室を開いています。「教室で教わったことをお家で話したら、お母さんもお兄ちゃんも喜んでくれたよ」9歳の少女ファリザが、誇らしげな表情で話してくれました。
アフガニスタンは5歳未満児の死亡率が世界一高い国ですが、村の長老や親たちと協力しながら、子どもたちに保健衛生や健康、栄養の大切さを伝えています。教室では年上の子どもたちがファシリテーター役を担い、子ども同士が教え学び合います。すると子どもたちは家に帰っても例えば母親に学んだことを伝えます。母親も「お腹を下した時は砂糖と塩水で対処するんだね」と子どもから学んだことを実践する。それを見て子どもは「私の言ったことが役に立った！」と自信を持ち始めていきます。
身近な人から認められることが自信へとつながっていく。子ども保健教育は村の衛生環境を良くするだけでなく、子どもたちの内なる自尊感情を育みます。ファリザが言いました。「大きくなったらお医者さんになって、病気の人たちを助けたい」瞳をキラキラと輝かせ、希望に満ちたその笑顔がとっても印象的で忘れられません。



ファリザ、白の布で包んだ顔から笑顔がこぼれた。



園田智也

2009年のアフガニスタン

子どもが教え学び合う「子ども保健教室」の普及

アフガニスタンは、5歳未満児の死亡率が最も高い国(※)で、約4人に1人が5歳の誕生日を迎える前に亡くなってしまいます。山岳地バーミヤンでは栄養価の高い多様な食材が不足し、子どもの発育不全が大きな問題となっています。長い紛争の間に教育や医療など社会基盤が弱体化。大人世代は健康的な生活を送るための知識や経験も少なく、子どもの栄養や衛生状態を十分にケアできない状況が続いています。
ＳＣは子ども保健教育を通じて、子どもたち自身が健康的な生活習慣を身につけることで感染症や栄養不良を防ぐ取り組みを行っています。1グループ24人、31グループ、計744人がそれぞれ村の家屋に集まって週2回教室を開きます。栄養や衛生に関する研修を受けた年長の子どもが年下の子どもを教えます。
教室で学ぶことは咳や風邪、下痢、寄生虫の予防、応急手当て、手洗いの大切さ、栄養など。参加した子どもたちが学んだことを家庭内でしっかりと実践することで、親やコミュニティにも栄養や病気に関する正しい知識が伝わり、子どもの生活環境と健康状態の改善につながっています。



ポスター教材や写真で健康について学ぶ子どもたち



「教室で学んだことを家族にも伝えたよ」

(※)The State of World's Children 2010

移動式「図書箱」の配布 バーミヤン州の生徒11,000人に読書の楽しさを

図書室がなく教材が不足する公立学校9校に、さまざまな分野の本が入った図書箱26箱を届けました。首都カブールで調達した本は小・中・高向けの読書本や絵本、英語教材、歴史の本など計5,200冊。借りた本で読み書きの練習をしたり、家に持ち帰って親や兄弟に読み聞かせをしたり、海外の世界や自然界のしくみに興味を持ち将来の夢を描いたりと、読書を通して子どもたちはぐんぐんと成長しています。



真新しい本を手に、子どもたちは食い入るように本を読んでいました。

Rewrite the Future アフガニスタンの教育復興支援

2009年7月から北部のファリアブ州、サリプル州で実施中の教育復興支援です。紛争の影響下にあるアフガニスタンにおいて基礎教育の質が向上することを目指しています。両州36校区150,000人の子どもを対象に2009年は教育チームの編成と現地のニーズ調査を実施。学校教員を対象に暴力や体罰に頼らない指導法研修を実施しました。2010年からは校舎やトイレなどの衛生設備の整備、就学前の幼児教育、栄養・衛生の教育、ＰＴＡや子ども委員会の支援を行っています。

スリランカ

2010年4月、ゆで上がるような暑さの中、北部の避難民キャンプでは人々が物資配布の列に並んでいました。その様子を少し離れた所から見ていた私に、14歳のセルヴァが好奇心に目を輝かせながら話しかけてきたのです。「今日はお母さんと食べ物を受け取りに来たの。お母さんはきっと、私の好きな魚のカレーを作ってくれるはずよ！」ちょうど1年前、内戦が激化した頃、セルヴァの家族は、毎日のように避難を繰り返し、時には真夜中に腰まで泥につかりながら逃げ続けたそうです。父親はその途中で行方不明になっていました。「友だちがたくさんいるから大丈夫。でも、先生や仲良しが村に帰ってしまうのが寂しい」そう打ち明けてくれました。セルヴァも家族と一緒に間もなく村に帰ることになります。
しかし、彼女の村は、かつての激戦地として知られており、今も無数の地雷が埋まったまま。「私はまだ帰りたくない。お父さんも見つかっていないし、不安なの」内戦が終わった今、多くの子どもたちが、このセルヴァのように、不安な気持ちでいると思います。「彼らが安心して自分たちの家へ帰れるようにしたい」という気持ちを強くしながら、私はキャンプを後にしました。



セルヴァと家族



山本俊輔

2009年のスリランカ

北部の避難民に対する緊急人道支援

20年以上続いた内戦に2009年5月、終止符が打たれました。激しい戦闘の末、35万人にも上る人々が避難民となり、その多くが避難民キャンプでの困難な生活を強いられました。ＳＣＪは避難生活を送る人々が少しでも日常性を取り戻せるよう、スリランカ北部のワウニア県、マナール県、トリンコマレ県で、避難民のべ109,282人に対し、以下のことを中心に支援を行いました。



衛生キット・乳幼児キットを受けとった避難民の家族

●緊急支援物資の配布

0～6歳までの子どもや妊娠中、授乳中の女性を中心に、栄養補助食などを、のべ30,765人に対して支給。避難民50,614人を対象に石鹸や歯ブラシなどの衛生用品、オムツなどの乳幼児用品、衣類など、身のまわりの必需品もあわせて配布。キャンプ内の生活環境を整え、急性の栄養失調や感染症が拡大しないようにつとめました。



仮設テントで栄養補助食を食べる女の子

●安全な遊び場、学び場づくり



キャンプ内にある臨時学習所で学ぶ子どもたち

18基の臨時学習所を設置。また子どもたちが遊びやケアを通じて日常性を取り戻せる場として「チャイルド・フレンドリー・スペース」12基を設置。ボールやお絵かき道具なども配布して、のべ24,872人の子どもたちが、新しい友だちと遊んだり学んだりする機会を得られました。また子どもの教育や保護のために、避難民の大人たち249人もボランティアとして力を尽くしてくれました。上記の支援以外に、国連、各国大使館、ＮＧＯなどと連携し、避難民の移動の自由と生活環境の改善を求めて、スリランカ政府に働きかけを行いました。2010年に入りキャンプにいた避難民の人々の帰還が始まっています。2010年も引き続き、帰還した人々や未だ家に戻ることができずにいる避難民への支援を実施しています。

東部の幼い子どもたちへのケア

2009年9月に開始し、2010年も進行中の支援です。避難民の帰還や再定住の始まったトリンコマレ県の29村で、0－6才までの子どもたち2,715人が心身ともに健やかに育つことができるようケアサポートの体制を築いています。具体的には、家庭訪問による乳幼児ケア、早期幼児教育施設の建設や修復、教員の研修、給食、健康診断など。地方政府や地域住民、現地NGOと一緒に活動しています。

ヨルダン

皆さま、こんにちは。ヨルダンから、ヒバというイラク人の女の子の家族のストーリーをお届けします。ヒバの一家はイラクでの戦火を逃れて、4年前にヨルダンにやってきました。閉ざされた生活の中、ヒバの父親はかんしゃくを起こすようになり、子どもに対しても無関心になってしまったとか。ある日、ヒバの両親がそろって、私たちの絵本づくりワークショップにやって来てくれました。
でも残念ながら、その時は、父親の楽しそうな顔を見ることはできませんでした。ところが後日、ヒバの母親が、はちきれんばかりの笑顔でこう言うのです「夫が変わったの！」詳しく話を聞いてみると、ワークショップが終わった後から、娘と一緒にお絵描きをしたりして、まったく途絶えていた子どもとのコミュニケーションが、また始まったのだとか。「私たちの活動が、閉ざされていたヒバの父親の心に少しでも触れることができたのかな」と私もうれしくなりました。子どもが元気に安心して暮らしていくには、やっぱり親が元気じゃないといけない。そんな想いで始めたワークショップが、本当に家族に笑顔をつくっています。



林田麻理子

２００９年のヨルダン

イラク難民 親子のための教育支援と心のケア

ヨルダンでの避難生活が長引くイラク人の子どもに対し、これまで、幼稚園を通じた教育機会の拡大を進めてきましたが、2009年には、それでもまだ幼稚園に入れない子どもたちを支援しようと、「家庭における教育」を広める活動を展開しました。

家庭で教育を。親と子の「絵本づくりワークショップ」

ヨルダン全12県のうち8県で、親と子を対象とした「絵本づくりワークショップ」を開催。1,095人の親と495人の子どもが参加しました。これは、子どもが家庭で学びの機会を得られるよう、親が教育の大切さに気づき、学びの機会を自らの手でつくってもらうこと、そして厳しい環境の中でも、より良い親子関係を築いてもらうことを目的としました。



子どもと一緒に楽しみながら絵本づくり



作成した絵本を子どもたちに読み聞かせる参加者

家庭での学習の教材として、家にあるものを活用した手作り絵本を提案したことで、工夫ひとつで子どもの教育機会をつくることが出来ることに親たちは気づいてくれました。また、自分が創作した絵本に子どもたちが生き生きした反応を見せてくれると、子どもと向き合う大切さを改めて認識してくれたようです。長びく避難生活でストレスをふくらませている親たちも、ワークショップの後、前向きな発言が増え、子どもの保護や教育への意識が高まると同時に、心にゆとりができた様子でした。



ワークショップで参加者が作成した絵本

ボランティアの育成とネットワークづくり

上記のワークショップを実施したのは、ボランティア指導者。活動の要となる人材です。2009年の活動を通じ、約50人のボランティアを育成。活動に関心のあるイラク人親を中心に子どもの保護、幼児教育の大切さについても啓発しました。またワークショップやイベントなどに参加した親、ボランティア、教員、そしてイラク人居住地域のヨルダン人住民は、教育や育児についてお互いに話し理解をし合い、子どもにより良い環境を整える協力関係を結ぶことができました。第三国定住の窓口は狭く、イラクへも安心して帰られる状況にないことから、多くのイラク難民がヨルダンに残ることが予想されます。2009年末より、これまでのＳＣＪの活動を地元のコミュニティセンターの職員や幼稚園の教員、またボランティアたちが継続していけるよう、現地コミュニティへの引き継ぎを行っています。

中国

「百合姐姐！」そう呼ばれた時のこと、今をふっと思い出します。「百合姐姐」とは、中国語で「ゆり姉さん」という意味。そう呼んでくれたのは、四川省安県の山間部にあるチャピン村の子どもたちです。ふだん、東京で現地のサポート業務を担当している私は、四川大震災からおよそ1年経過した頃、事業の進捗を確認するために、この村を訪れていました。震災で心に傷を負った子どもたちのためにできることをしたい！と気合いを込めて被災地に入った私を待っていたのは、意外なほど元気な子どもたち。でも彼らが答えたアンケートには、「外を一人で歩くのが怖い」「夜が怖い」という回答がたくさん書いてあるんです。やはりあれだけの震災を経験して、何ごともなく過ごせるわけはないんですよね。こういう内面の変化は、周りの大人たちも気づきにくい。だからこそ、私たちは、子どもの心を理解し、そのケアを学ぶ大人向けの研修を積極的に行いました。参加した親からは、子どもたちの自信を育む環境づくりに前向きな意見が聞かれました。この村が完全に震災から立ち直るのは、きっとまだ先の話。でも、現地の子どもと大人たちは、しっかりと前を向いて歩きはじめている。そのお手伝いができたことを今も誇りに思っています。



百合姐姐と呼んでくれた子どもたち



今福ゆり子

2009年の中国

四川大地震 集団避難した子どもたちへの心理社会的ケア事業

2008年5月12日に四川省で発生したマグニチュード8の大地震により、中国では、死者およそ7万人、行方不明者1万7千人、負傷者37万人、被災者4,600万人という深刻な被害がもたらされました。この地震の影響により、約1万人の子どもたちが四川省を離れた土地での集団避難生活を余儀なくされ、震災による直接的なストレスに加え、住み慣れた土地や親元を離れたことなどにより、大きな精神的な負担を経験しました。ＳＣＪは以下のとおり、集団避難した子どもたちと、子どもを取り巻く大人を対象に、心理ケア専門家による支援を行いました。

子どもに対するワークショップ

平野部から約2時間ほどかかる山間部、茶坪郷の小学校で、小学校4～5年生137人に対して、子どもたちが心理的ダメージから回復する手助けを行うためのワークショップを実施。ワークショップでは、感情を自由に表現することで、子どもたちがストレスを軽減できるよう、心と体をリラックスさせる体操やダンス、絵本の読み聞かせ、作詩・作画といった活動を行いました。



心と体をほぐし心身ともにリラックスする方法を学ぶ。



みんなで作った詩をもとに絵を描く子どもたち

子どもを取り巻く大人に対する研修

子どもたちを長期的にサポートできる環境をつくるため、保護者54人、教員51人、地元政府61人に対して、子どもたちの心のケアに関する研修を行いました。参加者は非常に熱心で、「実践的な知識が身についた」（教員）、「子どもは心に傷を負っているが、今日の研修で子どもを尊重し、自信のある子どもに育てるのが重要だとわかった」（保護者）など前向きな意見をもらいました。

●四川大地震一周年記念フォーラム

子どもたちが被災時および避難中の経験を振り返り、コミュニティと分かち合うことを目的に、2009年5月に大型フォーラムを開催しました。フォーラムには集団避難した子どもに加え地元の子どもなど同世代の子どもたち計600名が参加しました。参加した子どもたちは、地域に伝わる伝承や震災前後で学んだことを基にしたパフォーマンスを自ら披露したほか、お互い助け合い協力する心を育むことを目的としたゲームや作画を通して交流しました。



晴天の下、子どもたちの笑顔があふれました。

日本

子どもの権利条約が国連で採択されてから20周年となった2009年。
3日に1人が虐待で命を落とし(※1)、3人に1人の子どもが孤独を
感じる(※2)など、この日本でも残念ながら子どもの権利の実現は
なされていません。そんな状況を当事者である子どもたち自身の“声”で
改善していこうと、2009年も活動を実施しました。
自分たちの“いじめ”の経験から「大人より小さいけど、勇気をだそう！」
と訴えた小学生。「かわいそう、などの同情だけでは救う事は出来ないと
思うので変えていこう、という強い意志を持ちたい」と考えた中学生。
SCJが機会を提供するだけで、子どもたちは自分の思いや考えを表現で
きることや訴える力があることを改めて実感しました。
そして、年度後半には7人に1人の子どもが貧困下にある(※3)という日本
の現実を受け止め、子どもの貧困解決に向けた事業立案を開始しました。
おかれている環境は違っても、子どもたち一人ひとりが、様々な思いや
考えを持っています。SCJは今後も子どもたちの状況を改善していくため
に、子どもたちの“声”に耳を傾け、その“声”を社会に届け、保護者や
地域の方々、行政、政府と連携しながら、子どもたちと共に活動を展開し
ていきます！


意見を出し合い映像制作中


みんなでメッセージを配信


「Hi5!」で世界を知る


津田知子

※1　2006年厚生労働省調査
※2　2007年ユニセフ白書
※3　2009年厚生労働省発表

2009年の日本

日本の子どもに対する教育事業“Speaking Out”

子どもの権利条約の基本原則の一つである子ども参加を重視し、日本の子どもの意見表明を促進するため、“Speaking Out(以下SO)”を実施しました。

参加型学習プログラムの実施

東京・大阪を中心に計78ヶ所で実施。小・中・高校生を中心にのべ2,692人とボランティアのべ258人が参加しました。その一つとして、小学校高学年から高校生が「私にできること」をテーマに、自分たちのメッセージを映像で発信する“Child to Publicキャンペーン”を展開。全国9地域15ヶ所から応募された48本の映像はホームページを通じて発信し、その中からセーブ・ザ・チルドレン賞、メディア・リテラシー賞各2作品を選考しました。子どもたちは、いじめや差別、コミュニケーションといった身近な課題について「私にできること」を考え、映像にしていく過程で、意見表明の大切さを実感していました。また、高校2校で連続ワークショップ“Child to Childプログラム”を実施。高校生が子どもの権利を理解し、自分や世界のことについて第三者に伝えていきました。

教材の開発・普及

2003年から実施してきたSOの知見を集約したポスター式教材「Hi5!（ハイファイブ）」は、貧困や紛争などの10種類のテーマすべてが完成し、8月より販売を開始しました。より多くの地域のより多くの子どもたちが世界の子どもの状況や国際協力活動について知ることができるように、「Hi5!」を普及。企業や宮城・愛知・兵庫の国際協力団体にノウハウを伝え、協働実施するというユニークな実践は、外務省主催「グローバル教育コンクール2009」活動報告部門にて優秀賞を受賞しました。また、世界の子どもの問題や子どもの権利条約を知るための写真を使った教材、教員向け子どもの権利教材の開発を子どもたちや教員と共に開発するなど、教材のさらなる充実化を図りました。


子どもたちが楽しみながら学べる「Hi5!」

多様な団体・機関との連携強化

社会全体で子ども参加を促進するために、広い地域の子ども支援、国際協力・交流団体、学校等と協働し、ネットワークを構築しました。また、大正大学のびのびこどもプロダクトコースの一部授業の立案および実施を担い、大学機関との連携も強化しました。

子どもの権利に基づく子育て観の啓発“ポジティブ・ディシプリン”

SCがモンゴルをはじめ世界15ヶ国ですすめるポジティブ・ディシプリンを通じて、子どもを支える大人への啓発も実施しました。「ポジティブ・ディシプリンのすすめ～親力をのばす0歳から18歳までの子育てガイド～」を2009年5月5日に明石書店から出版（初版3000部）。その後、著者を招いたプロモーションイベントや保護者向けのセミナー、子ども関連雑誌などへの投稿を実施。書籍は増刷となり、読者からは「長期的な視点と子どもの目線を大切に、毎日の子育てをしていきたい！と実感しました」といった声が寄せられています。

インドネシア

インドネシア緊急支援

スマトラ島西部パダン沖地震 子どもたちに対する 緊急教育支援

2009年9月30日にスマトラ島沖で発生したマグニチュード7.6の大地震は、インドネシアの西スマトラ州に大きな打撃を与えました。道路や橋、電力、通信網といったインフラをはじめ、病院や学校、政府施設など主要な施設・公共サービスが被害を受け、死者数は1,117人、重軽傷者数は2,902人、倒壊・損壊した家屋は18万世帯以上にのぼります。学校施設では204校（2,943教室）が被害を受け、就学前教育から中学校まで、およそ9万人の子どもたちが影響を受けました。SCJは、被災直後から日本人が現地に入り、西スマトラ州パダン・パリアマン県で支援活動を実施しました。



倒壊した家の中を歩く子どもたち



校長先生に学用品キットを手渡す日本人スタッフ

教育支援物資の配布

子どもたちにとって学校は日常生活の一部であり、被災前と変わらず通学できるということは、子どもたちにとって重要なことです。



配布されたホワイトボードを仮設教室で用いて授業を行う先生と生徒



とても元気な笑顔を見せてくれた子どもたち

また、インドネシアでは試験の時期が迫っていたこともあり、スマトラの子どもたちへの教育支援は必要不可欠となりました。SCJは、授業用資材や学習道具を失くした子どもたちや教師の学習環境を整えるべく、被災した小学校23校を対象に、教室備品（ホワイトボード70セット）および学習用具（教師用キット80セット、学用品キット160セット、遊具キット80セット）の配布を行いました。また、配布物の使用方法について教員へのトレーニングを実施しました。上記の事業は、2010年1月2日まで実施した内容です。2010年からは活動内容を衛生教育支援に切り替えて2010年3月31日まで支援を行いました。

ガザ

ガザ緊急支援

武力衝突で 甚大な被害を受けた ガザ地区への緊急人道支援

2008年12月末から約3週間にわたる戦闘で、約1,800人が亡くなり、多くの人々は家を失い、水道や電気のインフラ、学校や病院なども破壊されました。SCは、戦闘が始まった直後から、備蓄されていた支援物資などを配るなど、以下のことを中心に、支援を実施しました。



爆撃を受けた学校

緊急物資の配布

子どもとその家族に対し、食糧セット（砂糖、米、食用油、豆など）、飲料水、衣類、衛生用品、乳幼児のための必需品など、生活に必要な物資の配布を行いました。食糧品は22,600人、その他の物資については、88,000人の子どもを含む158,000人が受け取りました。



食糧配給を受ける子どもたち

子どものための心のケアと保護

暴力や身近な人の死など、つらい体験をした子どもたちの心のケアを早い時期から始めました。現地の34の団体と協働で、ガザ地区全体に33ヶ所、「チャイルド・フレンドリー・スペース」を設置。瓦れきや割れたガラスのない安全な場所で子どもたちは安心して自由に遊ぶことができました。

学校への復帰を支援

計20の学校と提携し、幼稚園や小学校に2,000冊の教材、幼児のためにおもちゃなどを配布。9,000人以上の子どもたちがSCの活動に参加しました。また仮設の学習スペースを16ヶ所に設置。約2,000人の子どもたちが勉強をしたり、レクリエーションを楽しむことができました。

清潔な水の供給と衛生環境の改善

36の幼稚園に浄水装置を取り付けるなど、爆撃で壊れた上下水道の整備を行い、汚染された水で、特に幼い子どもが下痢などの病気にかからないように配慮しました。他、1,000世帯の家庭で貯水タンクと水道ポンプを交換、49,500人が使用する上下水道管の修復を行いました。

母子の健康をケア

食糧と安全な飲料水の不足から生じる栄養不良や感染症などを防ぐため、母親と子どもたち合計66,000人に医療支援を行いました。具体的には、妊産婦の定期健診、出産後の母親と乳幼児を対象とした在宅健診、栄養調査、5歳未満児にビタミン補助、8ヶ所の移動診療所を通じて診療活動、現地の医療機関への医療器具や衣料品の配布を行いました。

カンボジア

「小学校、とっても楽しかったです」～代表の子どもを5年間つとめたニィが小学校を卒業

2004年にSCが新築した分校に通い始めたニィ。両親を手伝いながら根気強く学校に通い続けたニィは、2009年、小学校の課程を無事に修了し、公立中学校へ入学することができました。この5年間でニィと同じくSCのサポートで小学校を修了した子どもの数は、カンボジア全体で808,195人に上ります。SCは引き続き、カンボジアで、学校教育の支援、大人からの虐待の保護、HIV/エイズに感染する子どもへの生活支援や差別の撤廃などに取り組んでいきます。


カンボジアの代表の子どもニィ

コートジボワール

「先生たちの体罰が減った！」～教員の変化にパパは喜んでいます。

内戦が長く続いたコートジボワールでは、子どもに対する暴力が、まだまだなくなりません。SCは2年間、コートジボワール政府に働きかけた末、2009年、学校における暴力や子どもの自尊心を傷つける行為を禁止する法律を復活させることに成功し、1,801の学校の全教室の壁に、『教師の行動規範』が掲げられました。代表の子どもをつとめるパパの学校でも、教員が生徒への接し方を真剣に考えはじめ、子ども主体のクラスを、子どもと一緒につくり始めています。


コートジボワールの代表の子どもパパ

ニカラグア

「みんなが僕を助けてくれるんだ」～エベルホスエは充実した学校生活を送っています。

障がいをもった子どもへの社会保障が十分でないニカラグアで、SCは、彼らへの医療活動、リハビリテーション、心のケア、公立学校への入学支援などを、地元団体「ロスピピートス」と協働で行っています。代表の子どものエベルホスエもSCの支援で小学校に通い始めた一人。車イスのエベルホスエのために、家族も、学校も、そしてSCも、試行錯誤を繰り返しながら、子どもたちが一緒に学べる環境を築いています。


ニカラグアの代表の子どもエベルホスエ

エチオピア

「ヤギをたくさん育てたの！」～ハワは大きく成長しました。

干ばつに備えてSCがエチオピアで実施している生計支援事業は、2009年、前年を上回る75,000世帯にまで拡大、ハワの父親も道路の建設や環境の保全などの公共事業に参加し、小麦などの食糧や収入源を確保。地域の人々と協力して村のインフラの整備に貢献しています。また家畜の飼育事業では、ハワもSCから預かったヤギのうち7匹を両親から任され、14匹に育て上げました。こういった生計支援や家畜の飼育事業が軌道に乗って安定した生活を送る家庭が増え、子どもたちは安心して学校に通えるようになりました。


エチオピアの代表の子どもハワ

（ハワは2009年で代表の子どもを卒業。
アフリカのチャイルド・リンクはコートジボワール1ヶ国に統合されました）

アドボカシー活動

SCJのチャイルド・ライツ・センターは、国連子どもの権利条約に定められた子どもの権利が実現されるよう、特に日本の政府といった政策決定者に対して以下のような働きかけを主に行っています。

●9つの主要な国際人権条約の中で、子どもの権利条約にだけ設けられていない個人通報制度の実現へ向け、10月から、24のNGO団体が名を連ねる「国連子どもの権利委員会に個人が申し立てできる制度を作ろう！キャンペーン」を立ち上げ、SCJはその事務局を担っています。

●日本政府が国連子どもの権利委員会に提出した報告書に対し、①政府開発援助（ODA）のあり方、②国内防災計画における子どもの視点、③子どもの人身売買、④紛争下の基礎教育に関する提言を行い、NGOレポートを作成、子どもの権利委員会へ提出しました。

●児童買春・児童ポルノ等禁止法改正案が日本の国会において成立するよう、2009年8月1日、その意見書を作成し、同改正に取り組む国会議員に送付しました。

グローバルキャンペーン

EVERY ONE～命を落とす必要のない子どもの命を守るために

現在、世界では年間900万人の子どもたちが5歳の誕生日を迎えることなく亡くなっています。その90%が、出産後のトラブルや肺炎、下痢、マラリアなど、予防や治療が施されれば守ることのできる病気が直接の原因です。「EVERY ONE（エブリワン）」は、2009年からスタートしたセーブ・ザ・チルドレンの新しいグローバルキャンペーン。2015年までに毎年5,000万人の子どもとその母親を対象に効果的な母子保健プログラムや子どもの健康と栄養プログラムを実施します。また、ヘルスワーカーなどの人材育成、そして皆で子どもの命を守るために、政府や国際社会に対して政策提言も行っていきます。

Rewrite the Future～ 一緒に描こう！子どもの未来

紛争の影響下にある子どもたちに教育の機会を提供することを目的としたセーブ・ザ・チルドレンのもう1つのグローバルキャンペーンは、2006年の開始以来、2009年までの3年間で、1,060万人の子どもたちの教育の質を向上し、そして100万人に学校へ通う機会を提供することができました。昨年は日本国内で、他のNGOと協力し、政府開発援助（ODA）で後回しにされがちな武力紛争国への教育支援を拡充させるよう、日本政府へ要請も行いました。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　2009年度　主な事業一覧

国	プロジェクト名	具体的な活動	総受益者数(人)	備考
ネパール	コミュニティへの働きかけを通じた公立小学校教育の質の改善事業	学校運営委員会の能力強化などによる学校の運営改善、学校入学キャンペーン、教授法や子どもの保護に関する研修など	84,000	左記は延べ人数（子ども、大人含む） ＪＩＣＡ助成
	武力紛争の影響下にある子どものための教育事業	学校支援、幼児開発教育センターや分校の設置、公立学校への編入準備コースの開設、学習用品の支給、学校入学キャンペーン、学習環境の整備、差別をなくす課外授業など	7,174	左記は延べ人数（子ども、大人含む） 外務省助成 Rewrite the Future対象
ベトナム	イエンバイ省、クアンチ省における総合的子どもの発達事業	栄養改善活動、産前検診や家庭訪問を通じた妊婦の健康促進、完全母乳育児の推進、ケガ防止のための子育て環境改善、事業パートナーの能力強化	7,000	左記は子どものみ（妊婦や研修参加者数は含まず） 外務省、ＪＩＣＡ助成 『OPPAI PROJECT』含む
	メコン・デルタにおける女性起業家自立支援事業	マイクロファイナンスを通じての家畜飼育、農業、小規模ビジネスなど	600	左記は参加女性のみ（子どもの数は含まず）
	子どもの参加による環境教育事業	子どものファシリテーター研修、教育セッションの実施	3,000	左記は参加生徒数（教育関係者や教員は含まず）
	台風ケッサーナにより被災した子どもの家族の緊急支援事業	生活必需品、衛生用品の配布など	76,293	左記はＳＣ全体の支援による受益者数
ミャンマー	カレン州パアンにおける子どもの健康と栄養事業	子どもの定期的身体測定、栄養給食ワークショップ、子どもの健康・栄養に関する行動変容研修、ハエ防止型トイレの設置、医療サービスの改善のための医療施設の修繕、母子健康手帳の利用研修、食糧確保のための野菜栽培や養鶏	18,000	ＪＩＣＡ助成
	サイクロン・ナルギスで被災したエヤワディ管区の漁民のための生計支援事業	漁業資材（カヌーボート、魚網、メンテナンス工具）の配布、工具の使い方や基本的な家計管理の研修実施	17,795	ＪＰＦ助成
	水と衛生の事業	安全な水の供給、簡易トイレの設置、村の貯水池の設置や修復、学校や家庭への衛生的なトイレの設置、衛生的な行動様式の啓発	47,500	ＵＮＩＣＥＦ協働
モンゴル	ゲル集落の子どもの生活視点及び子どもの保護体制確立のための能力向上事業	虐待のリスクを抱える子どもの保護センター運営、心理ケア・生活支援/指導、保護者向け体罰のない子育て研修、地域ネットワーク運営、社会福祉士向け能力向上研修、体罰全面禁止に向けた家族法改正案提出、子どもへの暴力禁止を訴える啓発、家族再統合促進	①11,886 ②389,647	①直接受益者数（センター利用者などの述べ数/各種研修参加者数は各回の平均より算出） ②間接受益者数（テレビ視聴者・イベント参加者など） 国際ボランティア貯金寄附金・地球市民財団助成
	子どもの権利実現のための暴力のない公平な教育環境推進事業	体罰のない指導法教本などの作成、学校を対象とした研修実施、学校運営に参加するための生徒会・保護者会の組織化、関係者の能力強化とネットワーク構築、体罰削減を目指す啓発	①23,534 ②25,700	①直接受益者（対象校生徒・教員・学校運営責任者・政府関係者など） ②間接受益者（対象校生徒保護者、学校運営委員会メンバー、政府関係者、ジャーナリスト、市民団体など）JICA助成
アフガニスタン	バーミヤン州における保健・衛生・栄養教育事業	子どもたちの感染症や栄養不良の予防を目的とした、子ども主体の保健教育事業。保健・衛生・栄養に関する研修の実施。	744	
	バーミヤン州の学校へ移動式「図書箱」の提供	公立学校への図書箱の配布による学習環境の改善	11,000	
	北部ファリアブ州、サリプル州での教育復興支援	基礎教育の質の向上を目的とした教育復興支援。教育チームの編成、現地のニーズ調査を行い、学校教員を対象に暴力や体罰に頼らない指導法研修を実施。	150,000	Rewrite the Future対象
スリランカ	北部避難民緊急支援事業	緊急人道支援物資の配布、臨時学習所と子ども広場の設置、リスク削除研修の実施	109,282	左記は延べ人数。ＪＰＦ助成
	トリンコマレ県における幼い子どものケア事業	家庭訪問による乳幼児ケア、幼稚園の建設や修復、教員の能力強化、定期健康診断、給食の提供など	2,715	左記は延べ人数。外務省助成
ヨルダン	イラク人・ヨルダン人親と子どもの緊急教育支援事業	幼児教育のためのボランティア指導者の能力強化、「家庭における教育」を促進するための「絵本作りワークショップ」の開催、ネットワーク拡大と充実、コミュニティ・センターの施設機能強化など	2,075	ＪＰＦ助成
中国	四川大地震で集団避難した子どもたちへの心理社会的ケア事業	四川省から雲南省に集団避難した子どもに対する心理社会的ケア研修、子どもを取り巻く大人へのキャパシティ・ビルディング、四川大地震一周年記念フォーラムの開催	2,751	ＪＰＦ助成
インドネシア	スマトラ島西部パダン沖地震で被災した子どもたちに対する緊急教育支援	仮設の学校テントでの授業に必要な備品（ホワイトボード）、学習用具などを配布	①1,600 ②223	左記は①生徒数②教員数 ＪＰＦ助成
ガザ	ガザ緊急人道支援	緊急人道支援物資の配布。子どものための心のケアと保護、教育、水と保健衛生、保健医療、生計の分野で支援を実施	89,647	これはＳＣ全体の支援。 左記は直接受益者の数。
日本	日本の子どもに対する教育事業 “Speaking Out”	学校等で子どもの権利や国際協力に関する参加型学習プログラムを実施。「Hi5!」をはじめとする教材開発と普及。子ども支援団体等との連携強化	①2,692 ②258	左記は延べ人数①小・中・高校生の参加者を中心とする ②ボランティア 地球市民財団との共同事業
	子どもの権利に基づく子育て観の啓発～“ポジティブ・ディシプリン”	書籍やプロモーションイベントを通じたポジティブ・ディシプリンの普及。保護者向けのセミナーの実施	3,000	左記は書籍の初版の数。 初版完売

※上記にくわえ、セーブ・ザ・チルドレンの事業地である、カンボジア（ＳＣノルウェー）、エチオピア（ＳＣイギリス）、コートジボワール（ＳＣスウェーデン）、ニカラグア（ＳＣノルウェー）の事業を支援する。

２００９年度収支計算書（2009年1月1日～12月31日）

Ⅰ.事業活動収支の部

1.事業活動収入

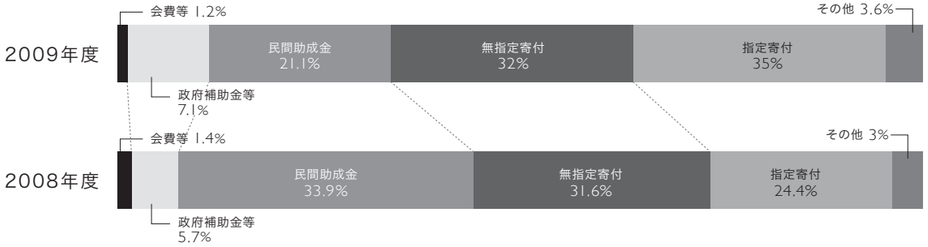
（単位：千円）

科目	2009年度	2008年度	差異
会費等	13,125	14,015	-890
政府補助金等収入	77,867	58,626	19,241
民間助成金収入	231,343	347,891	-116,548
寄付金収入	736,570	576,245	160,325
無指定寄付収入	351,442	325,150	26,292
指定寄付収入	385,128	251,095	134,033
海外事務所収入	14,927	25,118	-10,191
業務受託収入	6,886	4,699	2,187
事業収入	17,542	0	17,542
その他収入	546	815	-269
事業活動収入計	1,098,806	1,027,409	71,397

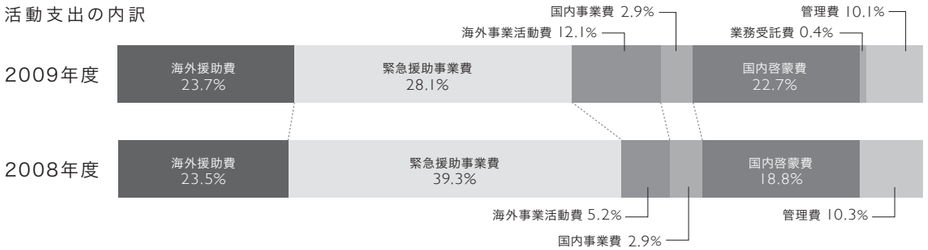
2.事業活動支出

科目	2009年度	2008年度	差異
海外援助費	246,861	271,852	-24,991
ネパール	31,000	72,430	-41,430
ベトナム	39,097	42,159	-3,062
ミャンマー	21,608	19,983	1,625
アフガニスタン	7,323	11,054	-3,731
モンゴル	42,234	45,324	-3,090
エチオピア	14,869	14,651	218
カンボジア	44,087	27,541	16,546
コートジボワール	9,739	7,378	2,361
その他の地域への海外援助	36,904	31,332	5,572
緊急援助事業費	292,492	454,193	-161,701
イラク難民支援（ヨルダン）	67,712	112,572	-44,860
スリランカ	97,941	26,870	71,071
ミャンマー	71,862	163,253	-91,391
スマトラ地震（インドネシア）	15,013	0	15,013
ガザ危機（パレスチナ自治区）	17,914	0	17,914
四川地震（中国）	22,047	9,528	12,519
その他緊急支援	3	141,970	-141,967
海外事業活動費	125,850	60,225	65,625
国内事業費	30,057	33,128	-3,071
国内啓蒙費	236,515	216,666	19,849
業務受託費	4,291	0	4,291
管理費	105,784	118,363	-12,579
事業活動支出計	1,041,850	1,154,427	-112,576
事業活動収支差額	56,956	-127,018	183,974

1.事業活動収入の内訳



2.事業活動支出の内訳



Ⅱ.投資活動収支の部

1.投資活動収入

	2009年度	2008年度	差異
特定資産取崩収入	50,376	43,403	6,973
固定資産売却収入	0	0	0
保証金返還収入	0	3,729	-3,729
投資活動収入計	50,376	47,132	3,244

2.投資活動支出

特定資産取得支出	5,333	5,924	-591
固定資産取得支出	346	5,633	-5,287
保証金差入支出	0	15,279	-15,279
投資活動支出計	5,679	26,836	-21,157

投資活動収支差額

投資活動収支差額	44,697	20,296	24,401
当期収支差額	101,653	-106,722	208,375
前期繰越収支差額	264,699	371,421	-106,722
次期繰越収支差額	366,352	264,699	101,653

パートナーシップ

私たちの活動は、公的機関、助成団体、企業、個人など多くの方々のあたたかいご支援、ご協力により成り立っています。

＜ブルガリ ジャパン株式会社＞
創立125周年記念事業の一環として、ＳＣのグローバルキャンペーン「Rewrite the Future〜いっしょに描こう！子どもの未来〜」へのサポートを2008年度より開始していただきました。2009年より、内側にＳＣのロゴが刻み込まれたシルバー製のアニバーサリーリングおよびペンダントを販売、同商品の収益の一部と、また、2009年末に開催されたハイジュエリーおよび高級時計のオークションによる収益全て、総額8億3,700万円相当（2009年12月時点）を、ＳＣにご寄付いただきました。

＜ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社＞
「バンドエイド」®日本発売50周年にあわせ展開したプロモーションの一環として、2009年6月から12月まで、「バンドエイド」®商品の売り上げの一部をご寄付いただきました。今回のご寄付により、ＳＣが活動するベトナムにおいて適切な「キズケア」教育を実施する『「BAND- AID」®×Save the Children』プロジェクトを展開しました。本プロジェクトにより『手当てのぬくもり』を感じ、適切なキズケアを実施できる環境作りが行われました。

＜有限会社三平商会・ドコモショップ館山店＞
社員や顧客の皆様が一体となったキャンペーンを展開し、モンゴルの貧困集落における児童教育センターの建設、また同センターの運営に必要なオフィス家具・機材・備品の調達にご支援をいただきました。さらに2010年度は、ネパールの幼児開発教育の支援事業にご支援をいただいています。

＜ジャパン・プラットフォーム（ＪＰＦ）＞
JPFは、NGO、経済界、外務省の三者がパートナーシップの下に協力・連携し、難民発生や自然災害時の緊急援助を、より効率的かつ迅速におこなうための組織です。2009年は、引き続きミャンマー、ヨルダン（イラク難民支援）、スリランカ、中国、そして新規でインドネシアでの支援に対して助成を受け、緊急下における教育や心のケアなどの分野で活動しています。

＜国際協力機構（ＪＩＣＡ）＞
2009年はネパール、ベトナム、ミャンマー、モンゴルでの教育、栄養、子どもの保護の分野で活動を展開しています。また、JICA-NGO定期協議会のNGO側コーディネーターを務めました。

＜外務省＞
外務省は、日本NGO連携無償資金協力において、日本のNGOが開発途上国・地域で実施する経済・社会開発事業などに助成しています。現在SCJでは、ネパール、ベトナム、スリランカにおいて、教育や栄養改善、子どものケアの事業を展開しています。また外務省が主催するNGO研究会（政府との連携/受益者の権利に配慮した援助活動のあり方）、海外NGOとの共同セミナー「NGOによる平和構築の現状と課題」に協力しました。

2009年度（2009年1月1日〜12月31日）に格別なご寄付を頂いた企業・個人の方々（五十音順）

●株式会社イデアインターナショナル　●上野製薬株式会社　●ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社　●株式会社ディーン アンド デルーカ ジャパン
●NPO法人ネットワーク「地球村」　●株式会社ファミリーマート　●株式会社フォリフォリジャパン　●藤原紀香様　●ブルガリ ジャパン株式会社
●有限会社三平商会
※個人名の掲載については、ご本人の了承を得ています。

ごあいさつ

世界の子どもたちのために、日頃よりＳＣの活動を支えてくださり、まことに有難うございます。特に2008年のリーマンショック以降、世界そして日本の経済状況が大変厳しい中で、多くの個人や企業の方々にご支援をいただきましたこと、心から感謝を申し上げます。

2009年から今年2010年にかけ、SCJは多方面にわたりチャレンジングなことが続いております。昨年は、これまで行ってきた開発や緊急支援などとともに、新しいグローバル・キャンペーン「EVERY ONE（エブリワン）」を開始しました。これは、現在900万人の5歳未満の子どもが予防や治療可能な病気で亡くなっている、その現実を直視し、その死亡率を減らそうという、まさに子どもの命に真正面から取り組む活動であり、SCJも、この尊い命を守る世界的な取り組みにしっかりと貢献していく所存です。

また、私たちは、日本国内の子どもへの支援もこれまで以上に充実させていきたいと考えております。その中核となるのが、深刻化する日本の子どもの貧困問題への取り組みであり、子どもの貧困状況の調査や政策提言などをとおして、当事者である子どもたちとともにこの問題の解決を進めて参ります。

こういった活動が多岐に広がりを見せる中で、組織としての能力を強化すること、支援者の方々をはじめ社会に対して説明責任を果たすこと、そして、ＳＣＪという団体の認知度を高め、さらに多くの支援者を募ることも私たちのチャレンジすべき課題となっています。現在の不況下では大変難しい課題でありますが、ぜひ皆様とより良い関係を深め団体としての力を蓄えながら、引き続き世界の子どもたちに質の高い支援を届けて参りたいと考えております。どうぞ、これからもご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

理事長　上野昌也

理事・事務局長　渋谷弘延

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン役員一覧（2010年６月現在）

名誉理事長	立野　純三	（株）ユニオン　代表取締役社長
顧問	服部　悦子	
	長谷川　恵一	（学）エール学園　理事長
	上島　一泰	（株）ウエシマコーヒーフーズ　代表取締役社長
理事長	上野　昌也	上野製薬（株）　代表取締役社長
副理事長	深田　宏	元オーストラリア大使
	荒船　旦子	
専務理事	南　昭彦	コスモ警備保障（株）　代表取締役社長
理事	石川　陵一	聖路加国際病院　副院長
	井田　純一郎	サンヨー食品（株）　代表取締役社長
	今村　英明	信州大学大学院イノベーション・マネジメント専攻科教授　早稲田大学大学院商学研究科客員教授
	上田　準二	（株）ファミリーマート　代表取締役社長
	小浦　芳生	小浦石油（株）　代表取締役社長
	山田　敏紀	（有）山田会計事務所　代表取締役
	横山　英子	（株）横山芳夫建築設計監理事務所　代表取締役
	渡辺　剛彦	（株）アテナ　代表取締役社長
	渋谷　弘延	（社）セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　事務局長
監事	河合　弘之	さくら共同法律事務所　弁護士
	鈴木　教夫	太陽ＡＳＧ有限責任監査法人　代表社員（公認会計士）